

文化資源としてのコパン遺跡 —新コパン考古学プロジェクトによる成果—

坂本 圭佑

人間社会環境研究科 博士前期課程 2年

1. はじめに

筆者は 2012 年 8 月 10 日から 9 月 31 日まで、ホンジュラス共和国、グアテマラ共和国でフィールド調査を行った。ホンジュラス共和国では、中村誠一先生のご協力の下に国立人類学歴史学研究所コパン支部にてコパン遺跡、9L-23 グループから出土したヒスイ一括出土資料の分析を行わせていただくことができた。また、新・コパン考古学プロジェクト (PROARCO) により発掘・修復調査された 9L-22,23 グループの一般公開式典に参加した。グアテマラ共和国ではティカル遺跡において金沢大学の北のアクロポリスプロジェクトに参加する機会を得た。文化資源としてのティカル遺跡の活用に関する考察は多々良氏の報告に詳しいので、ここでは PROARCO の成果を紹介することを中心に、文化資源としてコパン遺跡がどのように活用されているのかを報告したい。



図1 マヤ地域

(中村 2007: 地図1 マヤ地域) をトレース、改変

2. コパン遺跡概要

コパン遺跡は現在のホンジュラス共和国西部、隣国グアテマラとの国境から 12 キロのところに位置している (図1)。コパンの周辺地形は谷が連続しており、遺跡の中心部はコパンポケットと呼ばれ、近くにはコパン川が流れている。コパン川は、グアテマラ東部をほぼホンジュラスとの国境に沿って、高地からカリブ海へと流れるモタグア川の一支流である。モタグア川の中流域には、マヤ地域唯一のヒスイの産地が確認されており、コパンはヒスイへのアクセスに適した位置にある (中村 2007:43)。コパンの年間降水量は 1450 ミリ程度であり、年間平均気温は 26 度である。1 年は 12 月から 5 月までの乾期と 5 月から 11 月までの雨期に分かれる。海拔は 550m から 650m ほどである。熱帯雨林に覆われた低地に位置するティカル遺跡や、高地に位置するカミナルフユ遺跡とはまた違った環境で

あり、高地と低地の間の中間的な自然生態環境を持っていると言える (中村 2007:45)。

コパンの居住は紀元前 1400 年ごろから存在し、紀元前 900 年ごろになると、かなりの権力を持った首長が存在する社会になる。後に王朝が創設され、初代王の即位は紀元 427 年、紀元 820 年に王朝が崩壊するまで古典期マヤの都市として栄えた。コパンの中心 (中心グループ) では、北には石碑や祭壇が林立する大広場が、南には歴代王家の行政居住区域だったと考えられているアクロポリスが存在する (図2)。また、両者の間には球戯場が存在する。古典期後期 (8 世紀後半) になると王家の居住がエル・セメンテリオと呼ばれるアクロポリス南側の区域に移ったと考えられている。また、中心グループの東にはラス・セプトゥラス、西にはエル・ボスケと呼ばれるエリートの行政

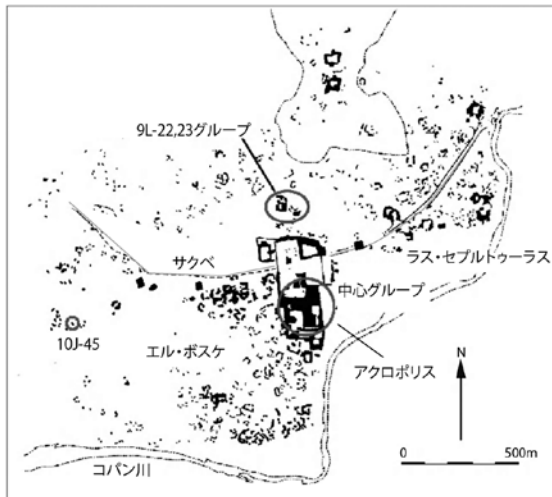


図2 コパン遺跡 都市中核部¹⁾
(PROARCO 2003, Fig. I - 1) を改変

居住区域が存在しており、サクベという道で中心グループとつながっている(中村 2007:46)。

3. 文化資源としてのコパン遺跡

コパン遺跡は1980年にユネスコの世界遺産に登録され²⁾、現在は年間17万人の内外の観光客が訪れるホンジュラス国内最大の文化観光資源となっている。遺跡近くにはコパン・ルイナス(Copan Ruinas)と呼ばれる村があり、コパン遺跡を訪れる観光客の多くはこの町を拠点にしている。筆者も国立人類学歴史学研究所コパン支部内にて資料調査を行っていた期間は、このコパン村に滞在していた。コパン村の中央には公園、教会、博物館があり、その周囲にはホテルや土産屋が数多く存在する。また、コパン村の人々の多くはコパン遺跡の考古学調査に従事したり、観光客に対する衣食住サービスで生計をたてているようだ。このように、筆者が改めて言うまでもなく、コパン遺跡は地域社会、国内、国外に対して経済面、教育面で文化資源として活用されていることが伺える。しかし、杓谷(2005:37)が「廃墟は後世に生きるものによって何らかの意味付けがなされることで遺跡と呼ばれる」と述べているように、コパン遺跡ももともとはただの「廃墟」であった。文化資源としてのコパン遺跡の在り方を明らかにするうえで、まずはどのようにコパン遺跡が「廃墟」から「遺跡」へと変わり文化資源として活用されるようになったのかを確認したい。

コパン遺跡は9世紀に放棄されて以来、1576年にスペイン人ディエゴ・ガルシーア・デ・パラシオスに

より発見されたが、コパン遺跡の存在が広く知られることはなかった。その後、1834年に中米連邦の士官だったフアン・ガリンドがコパンを訪れ、一ヶ月ほど滞在し、調査成果をヨーロッパの学会誌に紹介している。その調査成果を読み、1839年にはジョン・ロイド・スティーブンス、フレデリック・キャザウッドがコパンを訪れることになる。彼らはコパンを50ドルで購入し³⁾、キャザウッドは石碑などのスケッチ、遺跡の地図を作製した。彼らの旅は「中央アメリカ、チアパス、ユカタンの旅の事物記」として出版され、欧米の人びとに「マヤ文明」のイメージを広くしらしめることとなる(杓谷 2004:161-164)。現在の感覚だと、コパン遺跡を購入するには50ドルではあまりにも安すぎる。しかし、彼らの著書によれば、遺跡近くに住んでいたコパン遺跡の所有権利者に対して、スティーブンズらが遺跡を購入しようとした際に「土地はあまりにも値打ちのないものであり、遺跡を購入したいという言葉が信じられなかった」らしい(スティーブンズ 2010:119)。また、スティーブンズらはコパン遺跡を購入するだけでなく、石彫やその型をニューヨークに運び、博物館を建設しようと考えていたようだ(スティーブンズ 2010:110)。彼らの著書の記述が真実であれば、スティーブンズらのコパン遺跡購入は地域住民がコパン遺跡を価値あるもの=資源ではないかと考える契機となった可能性がある。しかし、この時点ではあくまで欧米にとっての経済・教育面での文化資源であった。コパン遺跡が地域住民に対して特に教育面で還元され始めるのはグスタフ・ストロムスヴィックによる博物館建設まで待つことになる。

フレデリックらがコパンに滞在した後、1881年にアルフレッド・モーズレーがコパンを訪れ、石造彫刻や階段の調査などを行った。その後、1891年から94年までハーバード大学ピーボディー博物館により、コパン遺跡でマヤ地域における最初の「科学的な」考古学調査が行われる。この調査では遺跡中心部の地図、広場や建造物の試掘などが行われた。また、1920年にはシルベイナス・モーレイが碑文を調査し、「コパンの碑文」を出版している。その後、ホンジュラス政府はカーネギー研究所の協力の下に、遺跡の中心部で大規模な発掘調査、修復作業を行った。このプロジェクトのディレクターであったストロムスヴィックは1935年から1942年にかけてプロジェクトの指揮を取り、壊れて崩壊したステラや球戯場、神聖文字の階段などを修復した。さらに、川の浸食からアクロポリス

を守るための堤防を作り、川の流れを変え、コパン村の中心に博物館や噴水、公園を建造した。これらの精力的な活動とその誠実な人格から、ストロムスヴィックは「ドン・グスタボ」と呼ばれ、村の人々に敬愛されている (Fash and Fash 2001:55)。

中村 (2007:274) が「過去の社会や文化を研究する考古学だけでなく、遺跡保存の問題や現代的な諸問題をも視野に入れていた点で、現在のわれわれのプロジェクト形成にも参考になるところが多い。」と述べているように、ストロムスヴィックによるプロジェクトはその後のコパンにおける考古学調査のインフラ整備、また近隣住民のコパン遺跡に対する意識を高めるといって重要なものであり、模範となるものであった。特に博物館の建設により、ジョン・ロイド・スティーブンス、フレデリック・キャザウッドらによって、欧米にとっての文化資源としての価値がつけられたコパン遺跡は、地域住民に向けても教育面で還元され始めたといえる。

現在のコパン村の中心には公園があり、その西側にマヤ考古学博物館 (写真 1) が存在する。今回のフィールド調査中に訪れようとしたが、残念ながら展示内容改装のために閉鎖されていた。コパン村には他にも「Casa Kinich」と呼ばれる博物館が存在する。こちらにも 2 回ほど訪れたが、残念ながら閉鎖されていたため具体的な展示内容を見ることができなかった。しかし、コパン・ルイナス市観光課公式日本語ホームページ⁴⁾によると、マヤカレンダーの解説、マヤ球技のビデオ、考古学者の道具や、発掘の様子、マヤ時代からの動植物の解説パネル等があり、子どもたちが遊びながら楽しく学習できるような施設となっているようである。



写真 1 マヤ考古学博物館

4. 近年のコパン遺跡調査とその功罪

ストロムスヴィック以降にも、PAC1, PAC2 などのホンジュラス政府による大規模な発掘調査が行われ、1989 年からはアメリカの複数の大学調査団を中心に、アクロポリス考古学プロジェクトが始まった。

このアクロポリス考古学プロジェクトによる功罪は (木村 2012:31) でも述べられているが、広範なトンネル発掘により得られた大きな学術成果とは裏腹に、トンネルの埋め戻しや補強がないがしろにされるという問題を残した。その結果、1998 年に「ハリケーン・ミッチ」が襲来し、ラス・セプトゥラス地区の小さな建造物のいくつかが浸食・破壊され、アクロポリス考古学プロジェクトにより掘られたトンネルの一部が崩落してしまう。さらに、後にアクロポリスの東側の崩落という事態を引き起こしてしまうのである (中村 2007:128-142)。

「ハリケーン・ミッチ」の襲来に前後して、ホンジュラス政府は学術調査優先で保存処理を伴わない過去の調査を反省し、修復保存中心のプロジェクトを立ち上げようとした。このコパン遺跡保存統合プロジェクト (PICPAC) の指揮を執り、アクロポリス東側崩落の修復やトンネルの補強などを長年行ってこられたのが中村誠一氏である。中村誠一氏による修復・保存中心のプロジェクトは着実に進み、崩落したコルテの修復、補強が行われた。また、10J-45 の行政発掘では王墓を発見するという大きな成果を得られたのである。2003 年からは 9L-22,23 グループを修復・保存するために、新・コパン考古学プロジェクトが実施されている。

今回の派遣中に PICPAC や PROARCO など過去の調査によって発掘・修復された遺跡の現状、またどのように活用されているのかを実際に確認することができたので紹介したい。

5.10J-45 の文化資源としての可能性

10J-45 (図 2, 写真 2) は PICPAC によって調査・修復されている。残念ながら現在は地表面が草木により荒らされており、解説の看板もなくその概要がわからなかった。10J-45 は私有地ということもあり、現在も土地接収交渉が続いているが交渉が難航しているようだ。そのため、観光客が入ることはできないようになっている。しかし、10J-45 はアクロポリス外で初めて王墓が発見された場所であり、その学術的意義は非常に



写真2 10J-45

高く、昨年修復・一般公開された9L-22,23区域と同様に、文化資源として高く機能する可能性を持っている。10J-45は中心グループからは少し離れた位置にあり、コパン村からコパン遺跡公園に向かう途中の道沿いに位置する。将来的な遺跡公園化の際には、ラス・セプトゥーラスのように中心グループとは別に、独立した入り口を設けるのか。また、発掘・修復調査があまり進んでいないエル・ボスケ地区と共通の入り口を設けるべきかどうかを考えていく必要があると思われる。なお、10J-45の解説やPROARCOによる調査成果はコパン村の土産屋や遺跡ビジターセンターにて売られているコパン遺跡ガイドブック（Leonel 2008:47,67）にも掲載されており、コパン遺跡における調査成果の普及は着実に進んでいると言えよう。

6. アクロポリス東側の現状

国立人類学歴史学研究所職員のフェルナンド・ロペス氏に、アクロポリス東側（写真3）から掘られ、マルガリータ建造物へと続くトンネルを案内していただいた。トンネル内部は電灯が点々と設置されており、アクロポリス奥深くにまで延びている。入り口から50メートルほどは天井が板状のもので補強されていたが、途中からそれもなくなった。内部はかなり狭く、縦横にトンネルが張り巡らされていた。奥に進むと複数の分かれ道があったが、天井が崩落して使えなくなった通路（写真4）を確認した。フェルナンド氏によると、最近崩落したものであるという。また、26号神殿側面に掘られたトンネルでは、遺跡公園職員が崩落したトンネル内部から土砂を外に掻き出す作業を行っていた。2010年には日本の富山県で、埋蔵文化財センターの職員の方が洞窟内部を調査中に崩落にあい命を落とすという、いたましい事件があった。今回確認したトンネル内部の現状のままでは、作業中に同



写真3 アクロポリス東側



写真4 アクロポリス東側からマルガリータに続くトンネル内部（八木宏明 撮影、提供）

様の崩落に巻き込まれ、作業員が命を落とす危険が高い。これまでにコパン遺跡保存統合プロジェクトなどにより、アクロポリスのトンネル内部の補強が行われてきたが、可能な限りさらなる補強を急ぐ必要があるだろう。

7. コパン遺跡の教育面での活用

コパン・ルイナスにとって、コパン遺跡は文化資源としてどのように意識されているのか。これについては、通っていた語学学校の先生がコパン遺跡出土のヒスイ製品が盗難にあった事件について怒りをあらわにしていたことが印象に残っている。彼女はコパン村のために取り戻す必要があることを強調していた。この話からは彼女がコパン遺跡から出土した遺物が自分たちの生活に関わるもの、すなわち観光資源として重要であるという認識を持っていることがわかる。このような意識は地域社会がコパン遺跡を資源として活用していくうえで重要だと考える。

また、コパン遺跡は地域社会だけではなく、ホンジュ



写真5 遺跡大広場にて、ガイドの話を聞いている学生達



写真6 9L-22,23 に向かう途中の遊歩道に設置された看板と木製ベンチ

ラス全体の文化資源と考えられ、教育面でも活用されている。現地でのフィールド調査中に、ホンジュラス人の学生は毎月第4木曜日に無料でコパン遺跡を訪れることができることを知り、その日にコパン遺跡を訪れた(写真5)。かなりの数のバスが遺跡内に駐車され、遠くの地域から来訪した多くの学生が遺跡内を見学していた。学生が自国の文化資源を直接的に訪れることができる機会は、国民が文化資源を活用していくうえで重要である。

8. 新・コパン考古学プロジェクトの成果

コパン遺跡、大広場の北部に、通称「ヌニェス・チンチージャ」と言われる複合建造物群が存在する。この区域は PAC1 の調査により、9L-22 グループと 9L-23 グループに分けられており、エリートの居住区と考えられている (Fash and Long 1983)。当該区域における最初の調査は、ホンジュラス政府による観光客誘致のための滑走路建設に伴う緊急発掘であった。この調査はヌニェス・チンチージャ博士により行われたが、粗雑な発掘を行ったうえに、詳細な調査報告はされなかった。そしてそれ以降 34 年間もの間、当該区域は放置されていたのである (PROARCO 2003: vii)。これらの状況を踏まえ、ホンジュラス政府の要望と日本政府の援助の下、2003 年から中村誠一氏をディレクターとして PROARCO が開始された。このプロジェクトの社会経済的目的として、コパン遺跡公園内にて新しい観光スポットを創出することで、持続可能な観光を推進することがあげられている。また、近年の観光客増加による遺跡公園の容量問題に対し、9L-22,23 グループの修復による観光資源化で対処することや地元の雇用の創出も目的とされている (PROARCO

2003:7-8)。

遺跡ビジターセンターから大広場に向かう道を左折すると、9L-22,23 グループに向かう遊歩道の入り口がある。その小道は砂利で舗装されており、途中には PROARCO 出土遺物と動植物相を解説した看板、木製ベンチが敷設されていた (写真6)。看板は英語、スペイン語で記述されている。この看板に限らず、コパン遺跡における展示内容は基本的に英語、スペイン語の両方で記述されていた。筆者はかつてエルサルバドル共和国、チャルチュアパ遺跡カサブランカ公園において青年海外協力隊の短期派遣に従事したことがあるが、カサブランカ公園でも同様に木製のベンチが主流であった。木製のベンチは自然環境や景観に配慮している点では理にかなっていると思われる。なお、公開式典の前日に研究所職員のカルロス・カルバハル氏とともに、看板のゆがみを修正した。また、遺跡内部でゴミなどがポイ捨てされていることはあまりなく、遺跡の清掃や管理が持続して行われる体制が整っていることが伺えた。

遊歩道を先に進むと、9L-22,23 グループと屋外展示室が存在する。この屋外展示室前で 2012 年 9 月 5 日に、9L-22,23 グループの一般公開記念式典が行われた (写真7,8)。一般公開記念式典には在ホンジュラス日本国大使、中村誠一氏、ホンジュラス国立人類学歴史学研究所所長による挨拶が行われ、日本の援助に対する感謝を表す碑 (写真9) が公開され、9L-22,23 グループの解説も行われた。式典には村の人々も数多く出席し、国内のテレビ局による日本国大使、中村誠一先生への取材が行われるなど、文化資源としてのコパン遺跡に対する関心の高さが伺えた。

発掘、修復された 9L-22,23 グループを実際に歩いてみたところ、様々な点で工夫がなされていたので紹



写真7 9L-22,23 グループ一般公開式典



写真8 式典に参加したコパン村の人々



写真9 日本への感謝の碑



写真10 修復された9L-22,23 グループ

介する。まず、埋葬が出土した地点にレプリカが展示されている点が挙げられる(写真10)。この手法は野外展示施設で読んだ解説を思いだしながら、空間的に埋葬が出土した場所を把握することができる。この出土したものをそのままそこに展示するという方法は、コパン遺跡で近年主流になりつつあるようだ(中村2012)。ホンジュラスの中心グループの東側にラストロホンと呼ばれる区域が存在する。その区域にはコパン村でも一等ホテルの1つがあり、近年ホテルの敷地内でハーバード大学による発掘調査が行われ、多くの石彫が出土した。従来は、石彫の復元は CRIA にて行われるのが通例である。復元された石彫の多くはコパン遺跡に併設されている石彫博物館にて見ることができる。しかし、この調査では出土した石彫がその場で復元され、公開することが計画されているようである。このような展示方法は過去の復元された景観をそのまま見ること、観光客に強い印象を与えることができる。そのような意味でレプリカではあるが、埋葬を空間的に見ることができこの手法は、観光客としては楽しみである。また、遺跡に関する解説の看板がところどころに配置されていたが、短い文章で簡潔にまとまっていた。観光客は、まず野外展示施設において9L-22,23 グループに関する詳しい解説を読み、その後実際に遺跡を回ることができるようになっている。

野外展示施設には遺跡に関する解説だけでなく、遺跡見学におけるマナーについての標記も記されていた。マナーに関する標記はコパン遺跡のなかでは初めての試みだと思われる。近年、コパン遺跡を訪れる観光客が増加しているという問題の中で、持続可能な観光を推進するのが PROARCO の目的の1つであった。持続可能な観光を維持していくためには、遺跡見学に関するマナーの啓蒙も重要な工夫の1つであると思われる。

PROARCO による成果はコパン遺跡に新しい観光スポットを創出しただけではない。野外展示施設の解説からは、ホンジュラス人に対する博物館研修、現地作業員への考古学者の説明、国際保存シンポジウムへのホンジュラス人技術員の参加などの活動が行われ、目的の1つであったホンジュラス人の人材育成と雇用の創出は達成されたことが伺える。筆者がコパン村でホームステイさせていただいていたソイラ家のグスタボ氏も PROARCO の図面作製チームで見習いとして働いていた一人である。彼はその後、アメリカの大学のプロジェクトで働いていたが、コパン遺跡における

考古学調査プロジェクトが少なくなったため、残念ながら現在は別の仕事をしている。話を聞くと、考古学調査プロジェクトがないため仕方なく他の仕事に従事しているようであった。また、他にもプロジェクトメンバーだった人々と話す機会を得たが、一様に再び考古学プロジェクトで働くことを望んでいた。もちろん、すべての人員がコパン遺跡の調査・保存活動の仕事に復帰できるとは限らない。しかし、PROARCOによる人材育成は大きな意味があったと私は考えている。ホンジュラスのラ・エントラダ地域では青年海外協力隊員であった中村誠一氏のもと、調査を行う過程で、ホンジュラス人技術者が育ってきた経緯がある（中村2007）。彼らはPICPAC、PROARCOでも活躍し、前述のフェルナンド・ロベス氏を含む16人が正式に国立人類学歴史学研究所職員に採用された。このように、徐々にではあるが、ホンジュラス人が自国の文化資源を創出し、マネジメントする体制が構築され続けているのである。理想を言えば、コパン遺跡の観光収入やコパン村からの資金の中だけで、コパン遺跡が発掘され、修復され、観光スポットとして発展していく持続可能な開発があるべき姿ではないかと思う。しかし、すぐにそのような理想を達成することは難しい。ただ、筆者にはPROARCOに携わったグスタボ氏や同僚がコパン遺跡に関する仕事に従事することに対して、誇りを持っているように感じられた。これは、たとえ考古学調査に携わることができなくなっても、コパン・ルイナスの人々がコパン遺跡を文化資源として主体的に活用していく意識が高まっている証拠ではないだろうか。そのような意識の高まりこそ、文化資源としてコパン遺跡の持続可能な開発に必要なものであり、PROARCOによる重要な成果だと思う。また、ホンジュラス自身が主体的に文化資源をマネジメントできる満足な体制が構築されるまで、日本としても協力し続けることが大事ではないだろうか。

9. コパン遺跡と地域社会

コパン遺跡はその発見から近年に至るまで、欧米による文化資源的価値付けのもとに、発掘・修復調査が行われてきた。コパン遺跡の近くに位置するコパン・ルイナスもまた、欧米からの観光客を受け入れることでコパン遺跡の調査の進展とともに発展してきたといってよいだろう。実際、コパン村の土産屋にはマヤの多彩色土器のイミテーションや、マヤ文字を線刻



写真11 露天で売られている土産



写真12 マヤ文字を使用した看板

したペンダントなど、明らかにコパン遺跡とその観光客を意識したもの（写真11）が売られていた。また、ホテル名にロサリラと言ったコパン遺跡の建造物の名前がつけられていることから、地域住民は考古学調査の研究成果を積極的に取り入れ、古代文化を具体的にイメージ利用していることが指摘されている（佐藤1999:56）。

遺跡観光という視点から、杓谷（2004:166）は、現在コパン遺跡周辺に住んでいる人々⁵⁾はかつてそこに住んでいた人々の末裔ではないとして、遺跡にそのアイデンティティを求め、それを売り物にして観光客を集めているグアテマラやメキシコの先住民と遺跡との関係とは異なるとしている。また、現在グアテマラ東部とホンジュラス西部にコミュニティを持つ Chol' Ch'ol'の人々こそ、コパン遺跡に住んでいた人々の末裔だと考えられている。

そのような状況のなかで、かつてフローレス大統領は1998年8月の観光会議の講演で、文化の都としてのコパン遺跡、そしてその子孫としてのホンジュラス

人を強調した(佐藤 1999:56)。また、寺崎(2006:102-104)により、ホンジュラス国内の初等教育で用いられる教科書の分析から自国の先住民文化におけるマヤを先進文化とし、それ以外の自国の先住民文化を後進文化とする記述に基づき、ホンジュラス国がチオルティの先住民文化＝マヤ文化を強調した教育を意図していることが指摘されている。

このような政府によるマヤ文化の強調とその教育にも関わらず、2000年9月4日にコパン遺跡村の周辺部に居住しているマヤ系先住民チオルティの人々が、政治的な理由によりコパン遺跡公園を占領した事件があった(中村 2007:150-151)。観光収入の25%還元を要求するというこの事件からは、チオルティの人々がコパン遺跡を政治的な焦点となる文化資源としてとらえていることや金銭的な還元不満があることが伺える。

では実際、コパン・レイナスの人々は自分たちのルーツとしてではなく、観光客向けに意図的にマヤ的な標章を使用しているのであろうか(写真12)。中村誠一氏からは、チオルティ村落の人たちが遺跡発掘現場まで片道2時間以上を歩いて通っていたこと、これまでのPICPAC, PROARCOの調査にはチオルティの人々やコパン・レイナスの人々の両方が従事しており、双方の間にはチオルティとコパンの住民を分けるような視点はなかったと聞きすることができた。このことから、コパン・レイナスの人々とチオルティの人々の帰属意識がゆるやかなものであることが伺える。また、このことに関して、フェルナンド・ロペス氏から興味深い逸話を聞いた。チオルティとコパネコ(コパン・レイナスの人々の意)の混血として生まれた少年は、西洋風の顔立ちを持ち、チオルティの村落でチオルティ語を話す環境で育てられた。しかし、大きくなるにつれ、どちらのコミュニティに行っても自分たちとは違うと言われてしまうという話である。フェルナンド氏は笑い話として教えてくれたが、この話はコパネコと先住民であるチオルティの人々との関係の一部を表現しているのかもしれない。しかし、前述したようにチオルティとコパネコの関係は悪くない。著者の滞在期間中に、コパン・レイナス中心部にて観光会議が開催された。同時期にコパン遺跡に考古学隊員として派遣されていたJICA隊員の八木氏に話を聞いたところ、コパン・レイナスのホテルオーナー、レストランオーナー、近隣のチオルティの人々などが集まって、コパン・レイナスで開催するお祭りなどについて話し

合ったらしい。

以上のことから、私自身はコパン遺跡を媒介として、コパネコとチオルティの人々の間にはゆるやかな共同体意識のようなものがあるのではないかと想定している。また、地域社会主体の観光会議にチオルティの人々が参加しているという事実や、語学学校の先生がコパン出土のヒスイ製品盗難事件に怒るという話からは、コパン・レイナスの人々とチオルティの人々の双方が自らのルーツとしてコパン遺跡を見ていることが伺える。欧米により文化資源として見いだされ、発展してきたコパン・レイナスと世界遺産コパン遺跡。ホンジュラス国民のルーツ、そしてコパネコ、チオルティの人々のルーツとして、チオルティの人々によるコパン遺跡占拠などの問題を表面化しつつも、コパネコとチオルティの人々は地域社会の構成員として、文化資源としてのコパン遺跡をともに発展させていこうとしている。

10. 今後の展望

関(2004:206)は南米エクアドルの先住民カニヤリ人による遺跡の管理運営への関与を求める運動に対する考察から、文化遺産の保全、修復といった文化に対する援助や開発を立案、実行するうえで、文化遺産と地域社会の関係を把握することが重要であり、研究者は傍観者ではなく、媒介者として先住民の戦略を咀嚼し、外部の社会に伝え、行動していく必要があると述べている。同様に、コパン遺跡とコパネコ、チオルティ村落の人々の関係を明らかにすることは、文化資源としてのコパン遺跡の持続可能な活用を考えていくうえで重要であるだろう。また、チオルティの人々によるコパン遺跡占拠はあくまで行政に対する要求であり、そもそもコパネコとチオルティの人々間の帰属意識に隔たりはないのかもしれない。これについては今後聞き取り調査で明らかにする必要がある。

文化資源としての発展はその地域社会主体によるものが望ましい。コパン遺跡周辺では、文化資源として遺跡を持続的に活用していくために、コパン・レイナスの人々だけでなくチオルティの人々を含めた地域社会主体での取り組み(前述の観光会議など)がすでに行われてきている。寺崎(2006:110)の言うように、考古学研究成果により復元された歴史がどのように国家の歴史、国民の歴史として組み込まれるかは、ホンジュラス人自身の手によって委ねられるべきである

ことを意識する必要がある。しかし、コパン遺跡は世界遺産として人類が共有すべき「顕著な普遍的価値」を持つものであり、その活用と保存について考える立場では、我々日本人も当事者の1人である。本学のテキスト文化資源学の中で、文化を資源として考えることに對し、それが誰のものかという所有概念から検討するよりも、それが誰に對して役に立つのかという有用性の観点から検討されているが（鏡味 2012）、私自身は Choltey の人々、コパン・ルイナスの人々が文化資源としてコパン遺跡からその有用性（経済的・教育的）を享受し、文化資源とともに発展していく機会である遺跡の発掘・修復調査は大きな意味があると考えている。そのような意味で、日本もその機会の創出者であり続ける意義はあるのではないだろうか。また、私は来年から日本の民間企業で働く予定だが、PROARCO の成果と日本のホンジュラスに對する協力を一般の人々に紹介することで、お世話になったコパン遺跡と地域社会に對して、少しでも貢献していきたいと考えている。

謝辞

PROARCO メンバーの方々、ホンジュラス国立人類学歴史学研究所職員の方々、JICA 長期隊員の八木宏明氏、ホームステイ先のソイラ家の方々には現地での調査中に様々な点でお世話になりました。また、PROARCO ディレクターで本学教授の中村誠一先生には資料調査の許可、研究所への連絡などのフォロー、ご指導を賜りました。謹んで感謝申し上げます。

註

- 1) 黒く塗られた箇所は建造物を表している。
- 2) コパンは世界遺産登録基準における以下の基準を満たしたと見なされ、世界遺産に登録された。(4) 人類の歴史上重要な時代を例証する建築様式、建築物群、技術の集積または景観の優れた例。(6) 顕著で普遍的な意義を有する出来事、現存する伝統、思想、信仰または芸術的、文学的作品と、直接にまたは明白に関連するもの（この基準は他の基準と組み合わせるのが望ましいと世界遺産委員会は考えている）。
- 3) 実際にはコパンに留まりスケッチする権利を買っただけという説が有力である（杓谷 2004:163）。
- 4) <http://copanruinas.web.fc2.com/>
- 5) ホンジュラス国内の人口のおよそ 91 パーセントは先住民と白人の混血であるメスティソである。また、残りの 9 パーセントが少数民族で、内訳はスペイン系白人が 1 パーセント、アフリカ系が 2 パーセント、先住民は全体の 6 パーセントである。先住民には Choltey の他に、レンカ、ヒカケ、ミス

キート、ガリフナなどで構成される。2003 年度の情報によるため、現在は変化している可能性が高い（杓谷 2004:169-173）。

引用・参考文献

Fash, William.L. and Fash, William.B

2001 *Scribes, Warriors, and Kings: The City of Copan and the Ancient Maya*. Thames & Hudson; Rev Sub edition.

Fash, William.L. and Long, Kurt.Z.

1983 Mapa Arqueológico del Valle de Copán. In *Introducción a la Arqueología de Copán, Honduras Tomo III*. Tegucigalpa, D.C. , Proyecto Arqueológico Copán, Secretaria de Estado en el Despacho de Cultura y Turismo.

Leonel Marineroz, Vito Véliz Ramírez

2008 *STEP BY STEP THROUGH COPAN*. Heliconia.

PROARCO (Proyecto Arqueológico Copán)

2003 *Arqueología y Conservación en Copán: Investigación y restauración en los grupos 9L-22 y 9L-23 (Complejo arquitectónico Núñez-Chinchilla)* Centro Regional de Investigaciones Arqueológicas (CRIA), Copán Ruinas, Copán.

2004 *Arqueología y Conservación en Copán: Investigación y restauración en los grupos 9L-22 y 9L-23 (Complejo arquitectónico Núñez-Chinchilla)* Centro Regional de Investigaciones Arqueológicas (CRIA), Copán Ruinas, Copán.

鏡味 治也

2011 文化は誰のものか. 『テキスト文化資源学』. 金沢大学国際文化資源学研究センター編 . p2-6.

木村 仁美

2012 世界遺産コパン遺跡における文化資源の活用について . 『金沢大学文化資源学研究』第 4 号 . 金沢大学国際文化資源学研究センター編 . p31-36.

佐藤 悦夫

1999 ホンジュラスの観光について . 『富山国際大学紀要』. 富山国際大学編 . VOL.9.p49-58.

杓谷 茂樹

2004 『エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグアを知るための 45 章』 . 田中高編著 . p151-173. 東京: 明石書店 .

2005 遺跡観光におけるマヤ・イメージの生産と消費—カンクン、リヴィエラ・マヤ観光圏の場合—. 『マヤ・イメージの形成と消費に関する人類学および歴史学的研究』 . 研究代表者 吉田栄人 . p37-56.

スティーブンス著 児嶋桂子訳

- 2010 中米・チアパス・ユカタンの旅〈上〉—マヤ遺跡探索行
1839～40, 京都: 人文書院 .Stephens, John Lloyd. *Incidents of
travel in Central America, Chiapas and Yucatan.*

関 雄二

- 2004 遺跡観光と先住民蜂起-南米エクアドルのインカ遺跡-『文
化遺産マネジメントとツーリズムの現状と課題』西山徳明
編 .p195-208.

寺崎 秀一郎

- 2006 先住民文化遺産 / 資源の表象 : 中米ホンジュラス共和国の
事例を中心に . 『史観 (155)』 . 早稲田大学史学会 .p92-113.

中村 誠一

- 2007 『マヤ文明を掘る - コパン王国の物語 -』, NHK ブックス,
日本放送出版協会 .
2012 マヤ文明発掘調査の最前線 . 朝日カルチャーセンター名古屋
講演 .